

境の整備などが必要となっている。

最後に、本研究調査にご協力いただきましたAさん、雇用主、ならびにお忙しいなかご指導いただきました植村英晴教授には心から感謝申し上げます。

(参考文献)

- 1) 松谷直美 盲ろう者福祉の現状 全国手話通訳問題研究会 (2003年)
- 2) 中澤恵江訳 「アッシャー症候群」掲載(サンドラ・L. H. デイヴンポート医学博士) (<http://www.boystown.org/hhrr/index.htm> 2008年8月10日)
- 3) 中野善達訳 (キャロル・ターキントンアレン・Eサスマン) 聾・聴覚障害百科事典 明石書店 (2002年)
- 4) 久門道利・秋山博介他 社会福祉士国家試験対策用語辞典 弘文堂 (2008年)
- 5) 寺島彰、植村英晴、福島智 盲ろう者に対する障害者施策のあり方に関する研究、報告書 国立身体障害者リハビリテーション研究所 (2001年)
- 6) 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構 重複障害者(盲ろう者)の就業の実情に関する研究調査 研究報告書通刊260号 (2005年)
- 7) 饗庭貢 住まいと環境の照明デザイン コロナ社 (2003年)
- 8) 社団法人東京都障害者雇用促進協会 障害者の雇用を進めるために、障害者雇用好事例集 (2004年)

「二次障害のあるアスペルガー症候群のAへの支援に関する一考察」

浦安市障がい者福祉センター
比留間有紀子

はじめに

広汎性発達障害の中でも知的発達レベルの高いアスペルガー症候群について取り上げる。アスペルガー症候群は知的障害が軽度で言葉も流暢であるため、他の重度の自閉性障害と比べると支援の必要性が見落とされがちである。今日の現状では、適切な支援がなされないまま青年期を迎え、不適応状態にある人が多く潜在していると考えられる。

1. 研究の目的

本研究ではアスペルガー症候群の診断や対応がなされないまま思春期・青年期を送り、強い不適応状態の過程で万引きをするようになったAについて取り上げる。Aは28歳でアスペルガー症候群との診断を受け、自閉性障害のSPELLアプローチをはじめとした支援を実施し、万引きの改善を図った。ここでは、Aへの支援事例をもとに、二次障害のあるアスペルガー症候群の人をどのように支援するかを検討していく。

なお、本研究において、アスペルガー症候群としてのAの障害特性を一次障害、「万引き(非社会的行動)」を二次障害として位置づける。

また、この事例で取り上げるSPELLアプローチは『問題行動のあるアスペルガー症候群の人へのアプローチ』の実践セミナーにて紹介された内容に基づいている(2007年3月24、25日第122回国際治療教育研究所主催)。

イギリス自閉症協会が提唱する自閉症の支援5原則=SPELLアプローチとは、「Structure 構造化、具体化・Positive approche 肯定的な対応、成功体験、長所をいかす支援・Empathy 自閉症の人たちの文化への共感・Low arousal 低刺激な方法、環境・Links 家族や関係機関との連携」のことをいう。

SPELLアプローチの理論的・歴史的背景や実践

例はこのセミナーの資料に委ねたい。

2. 事例の概要

1) 事例Aのフェイスシートから

Aは幼少期より知的発達に遅れがなかったが、欲しいものを目にするまで手に入るまで泣きわめき続けるという行動を小学校高学年まで続け、母親はAの養育に戸惑いを感じていた。小学校から高校まで普通クラスに通学し中学では文化系の部活動に所属。まじめに学習をする一方、日常的にロッキングがあり、嫌なことが我慢できなくなったときに大きな声をだすことがあった。高校では学習のペースが他の人より遅れフォローが必要な場面があった。この頃から不眠・家族のお金を使い込む・万引きをするといった行動が表れ始めた。

高校を卒業後、高等職業専門学校に通い地元のサービス業に就職。職場の人間関係のつまずき(逆上して上司を殴ってしまう)などにより、立て続けに短期間で解雇されて不安定な青年期を送った。22歳のときに知的障害者としての療育手帳を申請し、Aの障害に理解のある職場を探し始めた。しかし就労にはいたらず自宅に引きこもりがちになったため、地域のB施設を紹介され利用を開始した。B施設を利用後のAは、自分の望む活動にのみ参加し気のむくままに行動したため「わがまま、身勝手」と受け止められて支援員との摩擦が著しく生じていた。万引き行為も複数回確認されていた。Aの非社会的行動は、興奮したときの激しい暴言などもあった。その一方で、Aは1人有的时候きに黙々と泣いて過ごしたり、ときおり激しくロッキングしたりするなど情緒的な不安定さが際立っていた。こうした状況下、新しくAの支援担当となった支援員Cが、保護者の承認を得てAとともに主治医に通院し、「高機能自閉症・アスペルガー症候群」の診断を受けた。

※このフェイスシートはAを担当した教師や母親からの聞き取り、日誌記録、ケースワーカーの面談記録をもとにしている。

2) アスペルガー症候群としてのAの障害特性とこだわり行動

Aの障害は、興味関心の偏り、自分本位な会話パターン、周囲との歩調が合わせづらいなど生活場面の各部分に表れている。他方、温厚な性格で他者とのコミュニケーションを楽しみ、一般教養の知識も豊富で、知的発達に遅れない自閉性障害であることが認められる。

日誌記録や行動に対するアセスメントをまとめると、Aの障害特性のなかでもこだわりの様相を示すものは次の点が中心的なものとして挙げられる。

- ・ものを無駄に消耗することはもったいないという強い固執があり、古くなったものを捨てることを要求されるときに抵抗し、不穏になる。
- ・もったいないという固執には‘お金をかけたくない’という強いこだわりがあり、特に家(母親)がお金を負担することに対する強い拒否感情がある。このこだわりが根底にあり、Aが万引きに陥った可能性がある。

3. 支援の方法

万引きをするAに対して以下の取り組みを行った。

1) 第1期 (2006年9月～)

・・・認知療法アプローチ、ロールプレイング、行動の見守り

2) 第2期 (2007年3月～)

・・・SPELLアプローチ、投薬治療

取り組みはB施設内を中心に行い、さらに通所前や帰宅後のAの行動を観察するためにB施設外で行った実践も含まれる。また母親に対しては、Aがたとえ拒否し続けたとしてもお小遣いを渡すことを続けるよう助言した。

4. 結果

1) 第1期

(1) 取り組みの詳細

・認知療法アプローチ

B施設の嘱託医療機関(メンタルクリニック)

ク)の協力を得て、月1回の面接を行った。《万引きをしたら母親が嘆き悲しむ》《お金を使い買い物をしたら母親が喜ぶ》の2点に単純化し認知に働きかけるアプローチを用いた。

・ロールプレイング

嘱託医療機関(同上)の指導のもと、買い物のレジでの金銭授受場面を再現したロールプレイングを行った。500円玉を用いて、お金を払えば商品をレジで受け取ることができるというやりとりをおこなった。

・行動の見守り

万引きを未然に防ぐことを目的として、帰宅後～街中を出歩くAに支援員が付き添いをしたり行動の見守りをした。万引きをしようとしたときは、未然に止めるためにAに声をかけた。

・その他

メンタルクリニックの嘱託医の助言により、母親は毎日お小遣いをAに渡して好きなものを買わせることを試みた。また、母親が食材の買い物などをAに頼むことにより、お金を使い買い物をする場面を増やすことにも取り組んだ。

(2) Aの様子

《2006年12月デイリーレコードより》

帰宅途中、Aはスーパーで商品のおまけ菓子を盗り、店外で食べ始めた。その様子を確認した支援員がAに声をかけた。「Aさん、それは何?」と問いただし菓子を取ろうとすると、Aは「何すんだよ」「お前、何言うんだよ」と辺りかまわず大声をだし、支援員に体当たりをしてきた。

《2006年9月日誌より》

駅前パン屋での惣菜のつまみ食いが明るみになり、施設長とAが面談をした。「万引きは犯罪で、窃盗罪。罰金か懲役に」と書かれた資料をみせて話をしたところ、Aは「もうやめてください」と声を荒げ、施設長を睨みつけて部屋から飛び出していった。

(3) 第1期の結果

認知療法アプローチを行った結果、Aは万引きが犯罪であり母親を苦しめているとの認識は持っていたが、それが自制心には結びつかなかった。ロールプレイングにおいては、レジ場面の再現それ自体が万引きの改善に役立てられたとは言い難かった。行動の見守りはおよそ半年にわたり続けられ、この間、万引きを予防する一定の効果をあげたものの、A自身が自発的な意思で万引きを思いとどまることはなかった。

また、母親から小遣いを渡されることに対しては、Aはお金の受け取りを拒んだ。その結果、Aはお金を携帯せずに街中を歩くことになり、万引きが繰り返された。

第1期の取り組みを総括して、支援員や嘱託医が働きかけることにAが反発することが多く、信頼関係が悪化した。また万引き現場を繰り返し止められたことにより、Aに精神的なプレッシャーがかかり、より不安定な情緒に陥った。「万引きをしてはいけない」という教育的なメッセージがAにはむしろ苦痛を与えた印象があった。

2) 第2期

(1) 取り組みの詳細

・SPELLアプローチ

万引きをするAに対し、SPELLアプローチに示されている《肯定的な対応、共感、低刺激な接し方》に基づいて対応を行った。

・Aが特に強い拒否反応を示す「ものを無駄に消耗する」場面においては、Aの言い分を聞くこととし、その主張はAのわがままではなく「こだわり」によるものと理解し受容した。

・懲罰的と受け止められるような言葉をAに用いないように、慎重に言葉を選んだ。

・作業場面などでAが主張するAなりのやり方(たとえ非効率的で期待に反する結果をもたらすものでも)があれば、支援員はA

の意見に耳を傾け、共感する姿勢を示した。

- ・ Aが関心を示さないことは、わがままゆえの無関心とは捉えずAの障害ゆえの行動と考える。やらないことを強制をしたり、ペナルティーを科すなどの対応をしない。
- ・ 決まっている予定を変更する場合は、急には変更をしない。変更によるAの不安や不満はできるだけ予測して予防する。
- ・ アスペルガー症候群としてのAの障害特性について、Aに関係する施設のすべての支援員や家族に対して周知し、Aへの理解を深めた。
- ・ Aの当たり前前努力や行動に対しても、支援員や家族はAを意識して褒めるようにした。
- ・ 投薬治療
主治医と相談の上で2007年3月より、【リスパダール0.6mg】を毎就寝前に服用をし始めた。以前より服薬していた【サイレース0.6mg】と合わせて、2種類の薬を就寝前に服用。
- ・ その他
母親がAにお小遣いを渡すことや買い物の依頼を継続的に取り組んだ。一方で《万引きはしてはいけない》という教育的なメッセージや、万引き現場を止める取り組みは中止した。

(2) Aの様子

《2007年3月のデイリーレコードより》

帰宅途中、スーパーのないいつもと違う道を選んだAに支援員が声をかけた。Aは「初めての道ですね、誘惑がない」と万引きをしないことを示唆した。

《2007年5月のデイリーレコードより》

1年前の様子について振り返った場面でAは、「天ぷらのつまみ食いとかありましたね」「あのあとから、お母さんを幸せにしたいって思い始めて頑張っているんだもんね」と話していた。

《2008年1月デイリーレコードより》

評価賞賛を伝えた支援員の言葉に対して、「基本的なことができるようになろうと思うんです」と

いう言葉が聞かれた。

(3) 第2期の結果

支援員や家族がAの障害特性を理解し、SPELLアプローチにもとづき対応したことで、Aの不安定場面が著しく減った。具体的には、支援員と主張が異なる場合、これまでであれば反発という形で平行線をたどっていたことも、どうしたら良いかを相談することにAは応じるようになった。こだわりである「ものの消耗」では、ヒステリー気味な抵抗ではなく、「自分はこちらしたい」という落ち着いた姿勢で話ができるようになった。また、周囲と積極的に会話をはじめ、支援員や家族との良好な関係が形成された。

投薬治療の開始後は、母親によると、夜間の睡眠がより深くなった印象があり、寝起きもすっきりとした印象だということだった。

この頃よりAは、母親から小遣いをもらうことに対して次第に態度を軟化させた。小遣いを毎日400円受け取り、好きなものを買う日課が習慣化され、Aはお金を携帯して街中を歩くようになった。この小遣いが定着したころより、Aの万引きは改善したと考えられる。

5. 考察

第1期の、二次障害である万引きに焦点を当てた支援は、Aの不安定な情緒を招き有効な支援とはならなかった。またそれらがAへのプレッシャーや否定的評価にもなり、支援者との信頼関係に悪影響を及ぼした。一方、第2期のSPELLアプローチを主とした支援は、Aの情緒的安定を引き出すことに成果があり、万引きの改善には有効な方法だった。

Aの事例より、二次障害のある対象者へ支援は、情緒的な安定を引き出すことや信頼関係を形成すること、肯定的な評価賞賛を行う接し方が優先的支援であると考えられる。そして、アスペルガー症候群としての障害特性（一次障害）をアセスメントし支援の軸にすることは必要不可欠である。これらを踏まえて、SPELLアプローチは対象者の

情緒的安定や信頼関係の形成に非常に有効な方法といえる。SPELLアプローチが示す、共感・肯定的対応・低刺激な方法などは、二次障害のある対象者だけでなく、アスペルガー症候群の人の二次障害を未然に防ぐ支援方法のひとつとして、活用することが可能だと考える。

他方、Aの事例から明らかにしたように、二次障害だけに着目した支援には限界があり、有効な手立てとはならないと考える。

6. まとめ

Aは知的発達レベルが高く、自閉性障害のなかでも軽度のアスペルガー症候群であるため、長期間にわたり一次障害が考慮されなかった。そして、支援者らはAがこだわることや自己本位に見える言動をAの性格の怠惰と見なし、障害特性に合わない不適切な支援を行ってきた。もし、アスペルガー症候群のAとして「こだわり」や「障害特性」に考慮し適切に支援が展開されていたならば、Aの二次障害の長期化を回避できた可能性がある。

これらを踏まえて、アスペルガー症候群の人の一次障害を適切にアセスメントすることは、支援の重要なポイントだといえる。重度の自閉症障害のケースと知的発達レベルの高いアスペルガー症候群のケースとでは、一次障害に対する認識、すなわち、それらを踏まえた支援がなされるか否かは多少なりとも差が生じている。アスペルガー症候群の人の、軽度ゆえに軽視される一次障害をいかにアセスメントし支援に反映させていくが、二次障害を防ぐ鍵だといえる。

参考文献

- 1) ローナウィング「自閉症スペクトル」東京書籍、1998
- 2) 内山登紀夫・水野薫・吉田友子「高機能自閉症・アスペルガー症候群入門」中央法規、2002
- 3) 佐々木正美「アスペルガー症候群・高機能自閉症」子育て協会、2000
- 4) 国際治療教育研究所編「問題行動のあるアスペルガー症候群の人へのアプローチ」2007

「知的障害のある人の地域生活移行過程における満足度の把握に関する研究」

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園/院後期3年

森地 徹

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

村岡 美幸

1. はじめに

日本における知的障害のある人の地域生活への移行は、数値目標を掲げて取り組んでいるいくつかの施設¹を除いて本格化されている段階とはなっていない。また、日本において知的障害のある人の地域生活への移行に関する研究はほとんど行われていない。そこで本研究は、長期間に渡り同一施設に入所していた施設入所者が地域に根ざした住居に移行した群(地域群)と施設に残留した群(施設群)とで生活満足度にどのような違いが生じるのかを明らかにするため、地域群と施設群との居住形態ごとの生活満足度の違いを調査し両群の比較を行うこととする。

2. 目的

地域生活への移行が移行者に及ぼす影響のうち、特に居住環境の違いが移行者の主観的満足度にどのような影響を及ぼすのか、地域に根ざした住居に移行した群(地域群)と施設に残留した群(施設群)との生活満足度の違いについて比較分析を行うことで明確にすることを本研究の目的とする。

3. 対象

同一施設に長期間入所している施設入所者で、地域に根ざした住居に移行した群(地域群)28名と施設で地域生活をするための支援を受けている群(施設群)45名を対象とした。対象のうち、重度或いは重複障害のため回答が困難なもの及び回答を拒否したものを除いて調査を実施した。有効回答数は地域に根ざした住居に移住した群が24名(回答

¹ 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園、宮城県社会福祉事業団(現在は宮城県社会福祉協議会)宮城県船形コロニー、長野県社会福祉事業団西駒郷(峰島、2004)など。